

～オホーツク管内博物館連絡協議会連絡誌～

はばた

翔けオ博協！

創刊号

発行年月日 令和3年3月31日
〒090-0015
発行所 北海道北見市公園町1番地
北網圏北見文化センター内
オホーツク管内博物館
連絡協議会事務局
TEL. 0157-23-6742
FAX. 0157-31-8344

令和2年度事業

1. 諸会議の開催

(1)令和2年度網走管内博物館連絡協議会総会

- ・期日：5月12日（書面協議）

報告事項

- ①令和元年度事業報告
- ②令和元年度決算報告
- ③監査報告

協議事項

- ①令和2年度事業計画（案）
- ②令和2年度予算（案）
- ③役員の変更（案）
- ④会則の改正（案）
- ⑤活動助成（案）

(2)令和2年度第1回オホーツク管内博物館連絡協議会役員会

- ・期日：2月2日（書面協議）

報告事項

- ①研修会の開催
- ②オホーツク管内博物館連絡協議会の研修事業の追加

協議事項

- ①宗谷管内学芸職員連絡協議会から依頼のあった巡回展への協力
- ②令和2年度予算の一部変更

2. 研修事業

令和2年度オホーツク管内博物館連絡協議会研修会（美幌町）

- ・期日：3月27日(土)
- ・場所：美幌町民会館
- ・内容：美幌博物館講座
「私たちのふるさと情報」
 - ①「オホーツクの自然を守れ！
PART3 オホーツクで実践した
水と生き物を守る活動」
 - ②「水田に戻ってきたヘイケボタル」
 - ③「令和3年度の研究報告の内容紹介」
 - ④「ハイマツの気候に
応じた生態について」
 - ⑤「特別展【びほろのアケボノ】の紹介」

3. 広報活動

- ・機関紙「翔けオ博協！」創刊号の発行

4. その他

- (1)会員相互の資料の貸借及び斡旋
- (2)講演、研修会、企画展等の後援～会員の各館事業に対する後援
- (3)宗谷管内学芸職員連絡協議会との連携事業
「樺太 絵ハガキに見る樺太の記憶～知られざる北の国境～」の開催

令和2年度網走管内博物館連絡協議会総会報告

令和2年度の総会は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、書面による協議となりました。報告事項では、令和元年度の事業報告・決算報告・監査報告などを報告、承認されました。協議事項では、令和2年度の事業計画・予算、役員の変更、会則の改正、活動助成について協議、原案どおり承認されました。新役員には、会長に北見市の長

谷川和義氏、副会長に紋別市の大平祐一氏、理事に網走市の吉村学氏、事務局に柳谷卓彦氏が就任し、他の理事・監事は留任となりました。また、会の名称が網走管内博物館連絡協議会からオホーツク管内博物館連絡協議会に変更となり、会員枠として個人会員、賛助会員が新設されました。その他、協議会会員に研修機会を提供するとともに資質向上を図る助成制度も新設されました。

「翔け才博協！」 発刊にあたって

オホーツク海の流氷も岸を離れ雪解けが進むにつれ、我々が生活するオホーツクのまちも徐々に春の色に染まってまいりました。

しかしながら、新型コロナウイルスのほか変異ウイルスの感染も叫ばれており、平常とは程遠い生活を余儀なくされているところであり、私どもも感染拡大防止策を図った上で何とか事業を実施しているところでもあります。

そのような中、今月 27 日には美幌町におきまして当協議会が助成する初めての事業を実施し会員の皆様にも研修としてご参加頂いたところでもあります。

また、会員であります東京大学大学院附属常呂資料陳列館の熊木教授の仲介により宗谷管内学芸職員連絡協議会との連携事業として樺太パネル展を今月 2 日から 11 日にかけて紋別市立博物館で実施することができました。

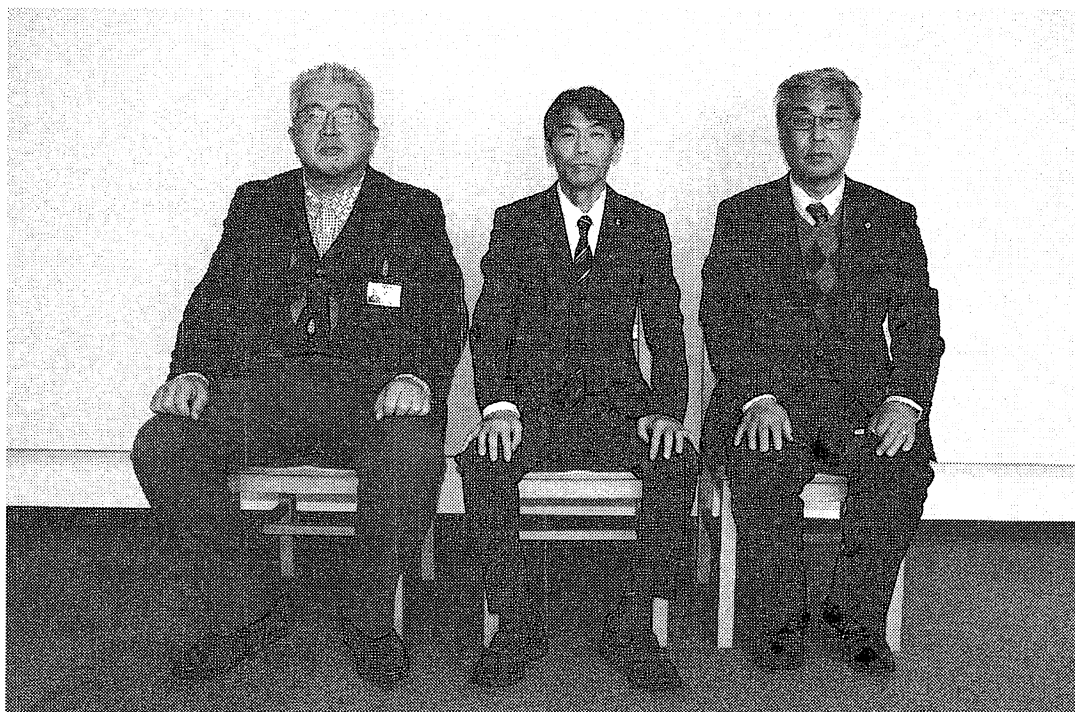
この会報を通じて年 1 回ではありますが、当協議会の取り組みをご紹介します。

コロナ禍で住民の皆さんも我慢疲れによりストレスが溜まる場所ではありますが、このような時こそ私どもの博物館や美術館などに出向いて頂き、ストレスを少しでも減らして頂ければと考えております。

令和 3 年度につきましても、大平副会長、柳谷事務局長をはじめ会員の皆様と連携しながら共に地域に貢献して参りたいと思っておりますので皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

令和 3 年 3 月 31 日

オホーツク管内博物館連絡協議会
会長 長谷川和義



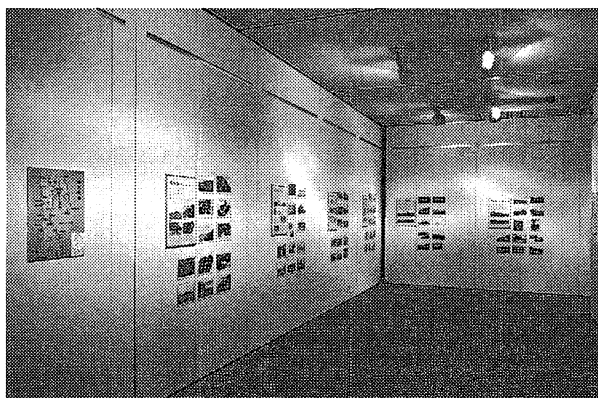
写真左より大平副会長、長谷川会長、柳谷事務局長

連携巡回展
「樺太 絵ハガキに見る樺太の記憶
～知られざる北の国境～」の開催
紋別市立博物館

令和3年3月2日(火)から3月11日(木)、紋別市立博物館市民ギャラリーにおいて、オホーツク管内博物館連絡協議会と宗谷管内学芸職員連絡協議会の連携事業「樺太 絵ハガキに見る樺太の記憶～知られざる北の国境～」を開催しました。

宗谷の歴史や自然、樺太、オホーツク文化をテーマとした巡回展の開催等、研究成果の更なる普及活用を模索していた宗谷管内学芸職員連絡協議会からの連携依頼を受け、今回の連携巡回展は開催の運びとなりました。

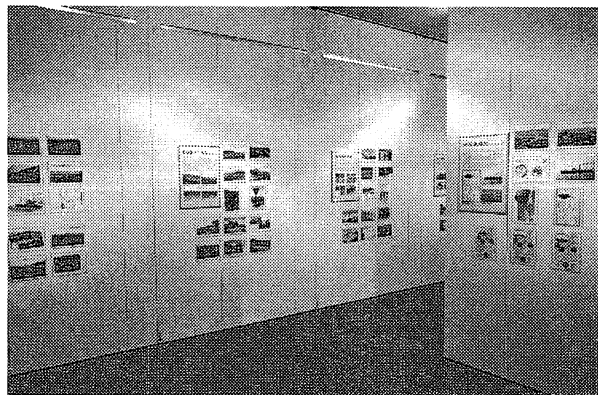
会場には、戦前の大泊や豊原といった樺太の町の様子や自然豊かな島、林業や炭鉱、製紙業、漁業、鉄道、連絡船などを紹介する21枚のパネルと、223枚の絵ハガキを展示しました。



「海の玄関・大泊」では、現在紋別市の姉妹都市となっているコルサコフ、当時の大泊を紹介。大泊は樺太と稚内を結ぶ稚泊連絡船の着港地で海の玄関口であり、鉄道も通っており利便性の高い町でした。昭和16年(1941)当時の人口は21,779人と樺太では豊原に次ぐ第二の都市であり、大泊市街地全景、銀座通りなどの写真からは当時の活気ある雰囲気が伝わってきます。

「最北の都市・豊原」では、昭和16年(1941)当時の人口は37,000人を数え、樺太の政治・文化・交通の中心地として発展した豊原につい

て、明治40年に発足した樺太庁、樺太鉄道局などの写真と共に紹介しました。現在はサハリン州の州都ユジノサハリンスクと名を変え、中心都市としての機能が引き継がれています。



「稚泊連絡船」では、稚内～樺太(大泊)間を繋いだ亜庭丸や宗谷丸などの連絡船の写真と共に、流氷に閉ざされる冬季運行に考慮し本格的な砕氷船として建造されていたこと、稚内から大泊までの210kmを約8時間かけて運行していたことなどを紹介しました。

「樺太の製紙工場」では、樺太の豊富な森林資源を目指して進出した王子製紙・富士製紙・樺太工業を紹介。昭和8年(1933)に3社は合併、王子製紙に統合し、国内紙生産シェアの85%を占める大企業に成長しました。

「樺太の漁業」では、世界屈指の好漁場と言われる樺太東西両岸での鯨や鮭鱒、鱈、鰈、毛蟹、帆立漁を紹介。大正3年に王子製紙が樺太に進出するまで、樺太での産業は漁業人口が最も多くの割合を占めていました。

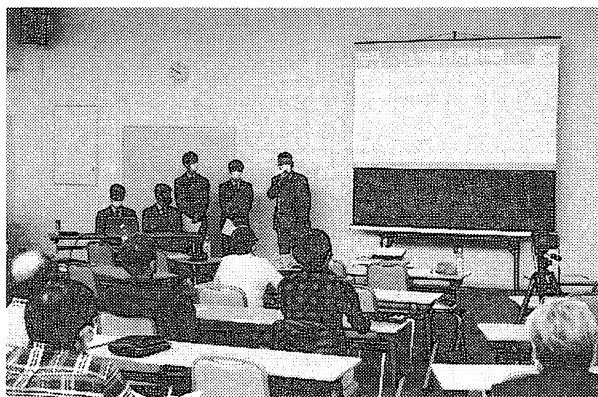
「樺太の先住民文化」では、樺太アイヌ、ウイльта、ニヅヒの暮らしを紹介。放牧していたトナカイが川を渡る様子や先住民居住区における先住民の住居の写真などは当時の先住民文化を知る貴重な資料となっています。

終戦から75年余が過ぎ、樺太からの引き揚げの記憶も少しずつ風化しつつありますが、ご観覧いただいた皆様にとって、この連携巡回展が樺太について学び、戦後の歩みを振り返る機会となれば幸いです。

令和2年度オホーツク管内博物館 連絡協議会研修会（美幌町） 美幌町民会館

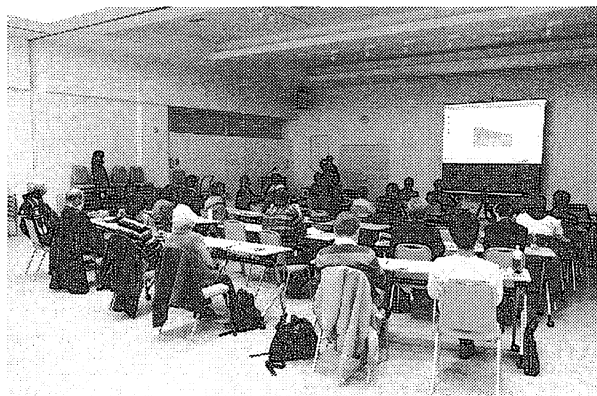
令和3年3月27日(土)、美幌町の美幌町民会館において、当協議会が助成する初めての事業、美幌博物館講座「私たちのふるさと情報」が開催され、本講座を協議会会員の研修会としました。

はじめに、美幌高等学校の皆さんより「オホーツクの自然を守れ！PART 3 オホーツクで実践した水と生き物を守る活動」と題し、今年度の活動報告がありました。網走湖を含めた網走川水系における外来種ウチダザリガニや生物の調査、駆除したウチダザリガニを使用した有機発酵肥料作りとザリガニ肥料による野菜栽培、水質調査と木炭による水質浄化試験、町内保育園との交流会での環境教育活動などを紹介いただきました。



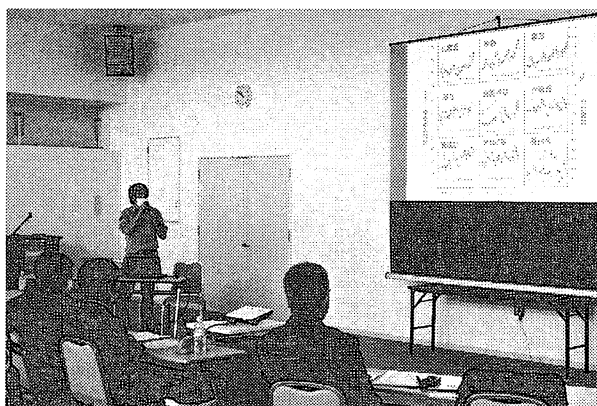
続いて、美幌博物館の鬼丸和幸館長より「水田に戻ってきたヘイケボタル」と題して、湿地や水田の減少と農業により急激に減少しているヘイケボタルの現状、ホタルと共生した環境保全型農業の事例を紹介いただきました。脱サラして故郷の石川県白山市渡津に戻り、専業稲作経営を始めた太田豊さんは、赤字で苦しい経営が続いていました。経費節減のための減農薬や畔除草まで手が回らなかったことで水田に多数のヘイケボタルが現れ、ホタルが棲める水田でとれた安全なお米として消費者の信頼を得られるようになったそうです。その後、紙マルチ栽培、カメムシ被害を回避するための苗の遅植え、畔の

草刈りを制限するなどして水田の完全無農薬化に成功しました。完全無農薬米としてブランド化も行い、高価格でも注文が増えるようになり、自然と共生した稲作経営が存続可能となりました。



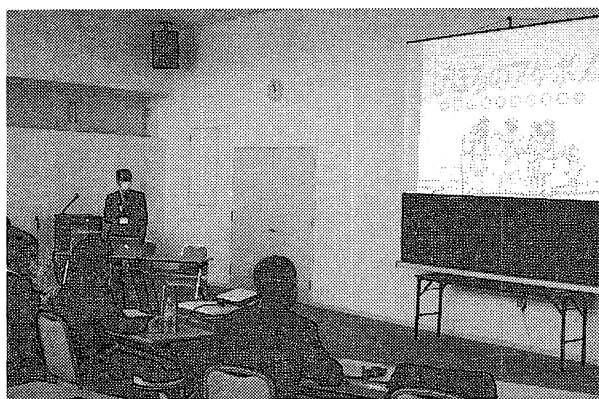
美幌博物館の城坂結実学芸員からは、美幌峠で発見された外来種アメリカオニアザミの調査など、美幌博物館における研究報告の内容を紹介いただきました。

続いて、知床財団の雨谷教弘研究員より「ハイマツの気候に応じた生態について」と題し、ハイマツの生態、気候の変化によるハイマツの分布域の変化や他の動植物への影響について解説いただきました。ハイマツは山や峠で地面を這うように生育する小型のマツの仲間で、成熟した球果を動物や鳥が食べ種子が散布されます。気温の変化と雪解け速度に敏感で、積雪深に対応して生育しています。芽鱗痕で毎年の成長が分かるほか、球果痕の数から当年の結実数を判別でき、過去に遡った豊凶の判別が可能です。気温が1度上昇すると約10%成長が増加し、北海道の大雪山では分布が拡大していますが、知床では分布に変化は生じていないようです。ハイマ



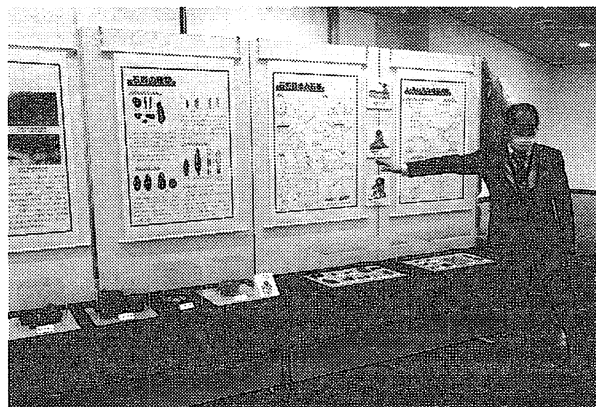
ツが増加すると高山植物が減少し、高標高域のハイマツの実が不足するとヒグマが低標高域を利用する問題が生じます。気候の変化は、ハイマツの分布や球果生産の変化につながり、ハイマツを利用する他の動植物にも大きな影響を与えることを紹介いただきました。

講座の最後に、美幌博物館の八重柏誠学芸員より、特別展「びほろのアケボノ」を紹介いただきました。今回の特別展開催の理由として、利用者から考古学の展示をやってほしいというリクエストが多かったことと、貸出していた旧石器時代の資料が戻ってきたことで開催が可能になったとのことでした。旧石器時代は人類史のあけぼのであり、美幌町内の遺跡調査で発掘された石器を大公開し、美幌のはじまりの歴史を紹介する内容となっていると解説していただきました。

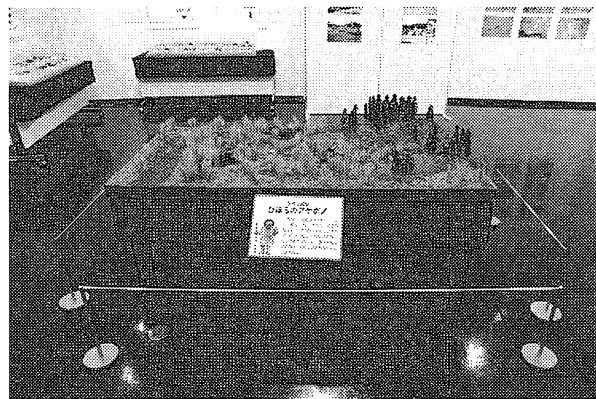


講座終了後は美幌博物館に移動し、八重柏誠学芸員の解説により特別展「びほろのアケボノ」を見学しました。会場には発掘調査によって得られた数多くの石器のほか、石器の材料である黒曜石や頁岩、メノウなどが展示され、解説パネルはイラストや写真が豊富に使われ、当時の人々の生活の様子や石器の特徴などがイメージしやすいものとなっていました。解説パネルについては学芸員全員で内容の確認を行い、分かりづらい箇所があれば修正を加え、できるだけ文字数を抑えてイラストや写真を活用することで理解しやすい内容にすることを心掛けているとのことでした。

美幌博物館の特別展の特徴として、手作りの精巧なジオラマがありますが、今回も旧石器時



代の美幌をリアルに表現した力作となっていました。制作方法は、最初にスタイロフォームで土台を作り、紙粘土を薄く張り付け、身の回りにあるものを工夫して、リアルな情景を作り出しているとのことでした。今回のジオラマでは旧石器時代の衣服や住居に皮の手袋を使用しているとのことでした。



今回の研修会では、美幌町とオホーツク地方の自然や歴史について、様々な活動をしている方から最新の情報を得ることができました。私たちの暮らすオホーツク地方を愛する気持ちは、この地方の様々な事柄に関心を持ち、深く知ることによって育まれると考えます。今回の研修会で得られた貴重な経験を活かし、今後も地域の人々に喜んでいただけるような事業の実施や情報の発信を続けていきたいと思っております。

オホーツク管内博物館連絡協議会会員名簿

(令和3年3月現在)

| 設置主体区分 | No. | 市町村名 | 施設名 | 備考 |
|---------|-----|------|--|------------|
| 町村 | 1 | 美幌町 | 美幌博物館 | |
| | 2 | 斜里町 | 斜里町立知床博物館 | |
| | 3 | 清里町 | 清里町郷土資料館 | |
| | 4 | 訓子府町 | くんねっぷ歴史館 | |
| | 5 | 遠軽町 | 遠軽町埋蔵文化財センター 遠軽町郷土館 丸瀬布郷土資料館 丸瀬布昆虫生態館 | |
| | 6 | 湧別町 | 湧別町ふるさと館 JRY | |
| | 7 | 佐呂間町 | 佐呂間町開拓資料館 | |
| 市 | 8 | 北見市 | 北網圏北見文化センター ピアソン記念館 北見ハッカ記念館 端野町歴史民俗資料館 ところ遺跡の館 | |
| | 9 | 網走市 | 網走市立郷土博物館 網走市立郷土博物館分館（モヨロ貝塚館） | |
| | 10 | 網走市 | 網走市立美術館 | |
| | 11 | 紋別市 | 紋別市立博物館 | |
| 国・道・財団等 | 12 | | (公財) 博物館網走監獄 | 網走市 (設置場所) |
| | 13 | | (助)北海道立北方民族博物館 | 網走市 (設置場所) |
| | 14 | | (助)北海道立オホーツク流水科学センター | 紋別市 (設置場所) |
| | 15 | | 東京大学大学院附属常呂資料陳列館 | 北見市 (設置場所) |
| | 16 | | (株)木のおもちゃワールド館 | 遠軽町 (設置場所) |
| 賛助会員 | 17 | | NPO法人 オホーツク文化協会 | 北見市 (設置場所) |
| | 18 | | GROUP 斜面 | 北見市 (設置場所) |